

臨床検査技師を取り巻く環境と未来戦略 —強くて柔軟な個人と業界をつくる術—

神戸 翼

医療法人社団永生会 永生総合研究所 所長

近年、臨床検査技師を取り巻く環境は大きく変化しています。少子高齢化や医療費抑制政策、デジタル技術の進展などの影響により、現場の負担は増大しつつも、その役割は社会においてより不可欠なものとなっています。しかし一方で、制度的にも職能的にも十分に評価されていない現実があり、静かなる危機が進行しているといえるでしょう。

本講演では、まず臨床検査技師が直面する社会問題を「静かなる危機」として整理します。過酷な労働環境や人材不足に加え、検査の高度化・自動化に伴う職域の変化は、個人と組織の双方に新たな対応を迫っています。続いて、こうした環境を規定する社会のルール、すなわち制度・法律・政治の仕組みについて概観します。誰がルールをつくり、どのように職能が制度へ反映されるのかを理解することは、今後の戦略を立てるうえで不可欠です。

さらに、専門職団体としての「技師会」の役割に触れます。学術的な知の集積や現場支援を基盤に、近年は地域社会への発信力も求められており、専門職の存在価値を社会全体へ橋渡しする機能が強調されています。一方で「技師連盟」は政治的活動を通じて制度を動かす力を持ち、検査技師が直面する課題を政策へ反映する重要な窓口となっています。この二つの組織の役割を正しく理解し、適切に関わるのが、職能の未来を支える鍵となります。

また、有志や非公式な社会活動の可能性についても考えます。SNSを通じた情報発信や小さな勉強会といった自発的な取り組みが、やがて大きな潮流を生み、社会を動かすことは少なくありません。小さな声であっても、積み重なれば制度や意識を変革する力となり得ます。

最後に、臨床検査技師の未来戦略について展望します。変化の激しい時代においては、組織に依存するのではなく、自ら考え行動できる「強くて柔軟な個人」が不可欠です。同時に、個人の力を結集し、学術・政治・社会活動を通じて組織的な動きを生み出すことも求められます。本講演を通じて、臨床検査技師という専門職がどのように未来を切り拓くのか、その術をとともに考える機会としたいと思います。